

〈研究ノート〉

デューイに学ぶ～今とこれからの教育

常磐大学・中央学院大学

非常勤講師 黒田利英

私がデューイの教育学に関心を抱くようになったのは、10年ほど前、東京日本橋のとある洋書店で『民主主義と教育』(Democracy and Education)をみつけたのがきっかけである。その後、その店へは何度か足を運んでデューイの著作物をさがし続けた。

折しも、学習指導要領で体験的・問題解決的な学習が提唱されるに及んで、デューイの教育学に寄せる私の思いはいつそう強くなった。

ただ原書で教育書を読むことには、手間・ひまがかかる上に抵抗も大きく、途中で挫折しかけたこともしばしば、それだけに読み終わったときの達成感・充実感はひとしおである。それに、デューイの文体や専門語にじかに接することができるのも原書ならではの味わうことのできない醍醐味である。

拙稿『デューイに学ぶ～今とこれからの教育』は、現時点で私なりにデューイの教育学から学んだことをまとめたものである。

1 為すことによって学ぶ

(1) やけどをした子供は火を恐れる

火をはじめて見た子供が、不思議に思って火に触ってみた。とたんにアツイ!と感じて手を引っ込めたが、すでにやけどをしていた。それ以降、その子供は火を恐れるようになった。これが、為すことによって学ぶ(Learning by Doing)、または経験から学ぶ(Learn from Experience)ことである。この中には、次の3つの要素が含まれている。

子供が火に触ってみたことは、トライ(Try)したことで、これは経験の積極的側面に当たり、やけどをしたことは、火が働きかけた反応を子供が受け取った(Undergo)ことで、これは経験の消極的側面に当たる。この関係は、当時の心理学からすれば刺激に対する反応、つまりS-R関係としてとらえられるであろう。結果として、子供は火に触るとやけどをすることを学ぶ。これは経験がもたらした意味(Significance)を理解したことである。

子供の認識は、これらの3要素を通して高められる。経験が教育的な意義を有するのはそのため、この中のどの部分が欠けても経験の名には値いしない。

経験が経験であるためには、積極的側面と消極的側面の因果関係が明らかになり、それに継続性(Continuity)が加わると、一つの経験が次の経験につながって系統的、発展的なものになる。

(2) 経験と思考

思考は疑問や戸惑いからはじまり、試行錯誤(Trial and error)を通して問題が解決される。ここで、もし問題解決に失敗すれば別の方法が試みられて、やがて成功に導いた方法が以後の経験では採用される。これら一連の行動に観察と洞察が加えられると、行動と結果、原因と結果を結び付ける因果関係が解明され、成功に導くための必要条件も明らかにされる。ここに経験と思考の関わりがあり、思考がもとになって経験から学ぶことが可能になるのである。

デューイは思考について次のように述べている。

『思考とか内省とかは、行動と結果の間に存在する関係を見極めることで、思考を伴わない

経験は無意味である。』(Democracy and Education<以下同書と略す> P・169、筆者訳)

試行錯誤による問題解決では、いつ、いかなる困難や障害に見舞われるか予想がつかないために、ここでの思考はリスクを伴い、冒険的で不安定かつ試行錯誤的である。ということは、経験もまた冒険的で不安定、試行錯誤的なものである。

経験から生まれた知識は、生きて働く学力として機能する。再度デューイの言葉を引用する。

『1オンスの経験は1トンの知識に優る。経験から生まれた知識は、バイタリティーと確実性に富んでいる。』(同書P・169、筆者訳)

2 興味と学ぶ力

(1) 馬を川へ連れて行っても水を飲ませることはできない

子供の興味は、時には自己中心的でエゴイステックなために、親や教師は興味を無視して子供に強制や管理を強いることがある。勉強を嫌がる子供に物や賞を与えたり、また脅迫をして無理やり勉強をさせようとするのはそのためである。このような方法は、確かに即効的ではあるが、これが長続きすることはあり得ない。子供は大人の顔色を伺ったり、また物欲しさや恐怖心から勉強を始めるだけである。それでも親や教師が子供に強制や管理を続けると、やがて子供は嘘をついたり、時には反発し、暴力を振るうようになる。強制や管理は子供をダメにするだけである。

馬を川へ連れて行くことはできても、馬に水を飲ませることはできないと言われるように、馬を川まで連れて行くことは強制できても、馬に水を飲ませることは強制できない。ここに強制や管理の限界がある。

子供の興味が自己中心的でエゴイステックであることは、大人の基準から子供の興味をとらえた場合で、子供自身は興味のおもむく方向へまっぐらにつき進んでいるのである。これは、自己中心性の中に潜んでいる力動性(Intensity)と直接性(Directness)のためで、親や教師はこれらの特性をふみにじるようなことがあってはならない。

(2) 興味もつパワー

興味(Interest)の語源は、二つのものを関係づけることで、学習においては子供と教材を結び付けるのが興味である。

経験から学ぶ授業では、興味をもとに試行錯誤を通して多くの困難や障害を克服しながら問題が解決される。ここでは、物事を最後までやり抜く強い意志が必要である。

意志の強い人とは、困難にめげずに最後までやり抜くと同時に、物事の筋道や見通しをもって行動する人のことで、それには熟考(Deliberation)と忍耐(Persistence)が要求される。熟考とは物事をよく考え、見通しをもって行動することであり、忍耐とは目標に向かって困難に耐えながらやり抜くことで、これらは経験を遂行するためのパワーである。興味には、これらのパワーが内在しているのである。

一斉授業では、一人の教師が多くの子供を対象に同一目標、同一教材、同一方法、同一評価のもとで画一的、効率的に授業が進められるために、ややもすると子供一人ひとりの興味が無視されがちである。それに対して、子供の興味を大切にす授業では、子供一人ひとりに合った目標、内容、方法、評価のもとで授業が進められるために学習の個別化・個性化が図られる。興味を重視することは、個性の伸長とも深く関わっているのである。

一方デューイは、成長を未熟から成熟の過程として、未熟の中に依存性(Dependence)と可塑性(Plasticity)を見い出して、それらを成長のための力としてる。

ここで、依存性を成長の力とすることには異論があるかもしれないが、子供は無力なるが故

に他の人に依存しなければならない。このことは、子供が社会との関わりもつことで、依存(Dependence)を相互依存(Interdependence)にして社会性を身につけるのである。依存が成長のための能動的な力とされるのはそのためである。

反面、子供にとって完全な自立や独立(independence)は、時にはうぬぼれや孤立を招くだけでなく、社会との関係を断ち切ってしまうために成長に終止符を打つことにもなりかねない。

可塑性とは、自分らしさを保ちながら周囲の状況に合わせて臨機応変に行動することで、これによって経験から学ぶことが可能になる。

これまで取り上げてきた自己中心性の中の力動性と直接性、それに熟考と忍耐、成長の中の依存性と可塑性は、どの子供にも生まれながらにして備わっている資質で、これらは学ぶ力と言ってもよいであろう。

デューイの興味論を通して、私は、興味は単なる方法概念だけの問題ではないこと、また生きる力についても、興味に内在する学ぶ力との関わりから追及する必要があるのではないかと考えさせられている。

3 問題解決学習

(1) 教えること・学ぶこと

一般に教えることは、体系的な知識を教師が子供に教授することで、学ぶことは子供がそれらの知識を習得したり記憶することとみなされる。ここでは、教えることと学ぶことが別の次元のものとしてとらえられることから、学習指導における二元論(Dualism)と言われる。二元論では、客観的で固定的な知識を効率よい方法で習得させることになるために、教授と学習の間にはアンチテーゼ(Antithesis)が生ずる。二元論をつきつめると、それが教育における目的と内容、内容と方法、知識と技術などの対立になって、一般的には前者が重視されて、後者が軽視されるようになる。俗に主要5教科に対して、技能教科が軽く見られたり、また5教科間にもハイアラーキーがつけられるのはそのためである。

二元論は、デューイが最も嫌うことで、二元論に基づいた知識は、一般的で広がりをもたず環境の変化に対応することができないと評され、対して経験から獲得された知識は、柔軟で創造性に富み、変化に応じて新たな意味をもつことができるとされている。

経験から学ぶ場合には、教師の役割は子供と教材の相互作用を図るための環境を整えることで、子供は相互作用から問題解決に取り組む。ここでは、教師と子供の活動が一体である。デューイはこの関係を次のように述べている。

『教師は子供であり、子供は教師である。もちろん子供はそのことを意識しないが、意識しないことがかえってよいことなのだ』(同書P・98、筆者訳)

これは童謡めだかの学校の『だれが生徒か先生か。』の状態と同じである。デューイは、経験によって二元論を克服しているのである。

(2) 問題解決の過程

為すことによって学ぶとは、経験から学ぶことで、そのプロセスは次の通りである。

- ①問題を把握する。
- ②問題解決のための仮説をたてる。
- ③問題解決のための計画をたてる。
- ④実験、観察、調査をする。
- ⑤問題を解決する。

さきに経験から学ぶ方法として試行錯誤を取り上げたが、ここでは盲目的な試行錯誤と目的

的な試行錯誤を区別しておく必要がある。盲目的な試行錯誤では、めくら減法に種々の方法を試みるのに対して、目的的な試行錯誤では、見通しや計画性をもって反省思考を働かせながら問題解決に当たることで、科学における実験的な方法と同じである。ここでは、次の二つのことが前提として掲げられている。

①事物や行為に物理的变化をもたらさない知識は単なる仮説か空論にすぎず、それらは実験によって確かめられなければならない。

②実験には思考が重要な役割を果たし、思考を伴わない試行錯誤は経験とは言えない。その上で、経験から学ぶ態度として次の4つがあげられている。

①直接性 (Directness) ————— 問題に対してまっしぐらに立ち向かう態度

②開放性 (Openness of mind) ——— 問題解決につながるあらゆる可能性に心を開く態度

③専心性 (Single mindedness) ——— 問題に対して興味、関心を集中させる態度

④責任感 (Responsibility) ————— 見通しをもって問題解決に当たる態度

これら4つの態度は、それぞれがばらばらに存在しているのではなく、③の専心性がもとになって、それが①の直接性や②の開放性、さらには④の責任感に結び付いて全体が一体になっていると解されるべきであろう。

さて、今日求められている体験的・問題解決的な学習については、これまで取り上げてきた問題解決学習をベースにして、その中で自ら学び、自ら考えることを通して知識とともに思考力、判断力、表現力、創造力の育成をめざす学習方法、言い換えれば新しい学力観に対応した新しい問題解決学習としてとらえることができるのではないかと私は考えている。

4 開かれた学校づくり

デューイは、社会について次のように説明している。

『社会とは、人々が共通の方向と共通の態度、共通の目標によって結ばれているところで、人々が要求や目標を共有するためには、それぞれが考えを出し合うことと思いやりの心をもっていることが重要である。』(School and Society P・14、筆者訳)

一方、コミュニティについては、次のように述べられている。

『コモン (Common) とコミュニティ (Community) とコミュニケーション (communication) の間には、ことばの派生関係以上のつながりがある。人々は、コミュニケーションを通して共通性を共有しながらコミュニティの中で生活している。コミュニティ内では、目的や信念、希望等に関して共通理解が図られ、だれもが同じような心情 (like mindedness) を抱いているのである。』(Democracy and Education P・4、筆者訳)

要するに共通性とは、コミュニティ内で、人々が同じような物の見方、考え方、感じ方、行い方をすることであるが、これだけでは同質社会の域を脱することができない。

ギャンググループのような閉鎖社会では、共通性や同質性が温存されて特殊性や異質性が排除される。このような社会は、柔軟性や創造性を欠いて硬直化する。それが開かれた社会では、コミュニケーションを通してコミュニティ相互の交流が図られ、新しい状況に柔軟に対応しながら変革が行われる。ここでは、他のコミュニティが有している特殊性や異質性を同化して、そこから新しいものを生み出す。ここで、社会変革を可能にするものはバイタリティーに富んだコミュニケーションで、コミュニケーションがバイタリティーに欠けると社会は型にはまって硬直化する。

要するに開かれた社会とは、コミュニケーションが開かれていることで、そこから社会変革と民主主義が達成される。

ちなみに、民主主義についてデューイは次のように述べている。

『民主主義とは、政治形態だけの問題ではなく人々が互いに交わり、経験を共有する生活のモードである。お互いの関心事を出し合って、よりよいものを求めようとすれば自ずと交流の輪が広がり、一人ひとりの存在価値が認められ、果てはこれまで閉ざされていた階層や人種、国家間の障壁を取り除くことができる。』(同書P・7、筆者訳)

アメリカの学校のように人種、宗教、慣習等を異にする子供が混在している所では、それだけ新鮮でより開かれた環境を提供しているのである。

ところで学校とは、ミニコミュニティ (Miniature Community) あるいは初歩的な社会 (Embryonic Society) で、ここでも開かれていることが重要である。

その上で学校環境に関して、次の3つの条件を掲げている。

- ①環境は、複雑な内容を単純化して、段階的に組み合わせること
- ②環境から有害なものや価値のないものを取り払って、よりよい内容を精選すること
- ③多くの要素のバランスを図って、他の環境との交流を図ること

今日の学習指導要領が求めている開かれた学校づくりでは、連携と交流があげられている。連携とは、教師が地域社会に理解や協力を求めたり、学校間で学習指導や生徒指導について共通理解を図るなどであり、交流とは、子供が学校間あるいは特殊教育諸学校の子供と活動を共にすることである。これらのことは、まさしくデューイのコミュニティ論と合致するものである。要は、開かれた学校づくりを単なる形式的なもので終わらせることなく、総合的な学習の時間や学習指導、生徒指導等の充実はもとより、学校活性化に結び付かなければならない。

これまで『デューイに学ぶ～今とこれからの教育』と題して4項目を取り上げてきたが、これらの内容はデューイの教育学の中核をなすもので、全体が民主主義と児童中心主義の理念で貫かれている。

デューイは、エマーソンの言葉『子供を尊重せよ』(Respect the child) を引用しているが、この語のもつ意味をより深く理解するためにもさらなる研究をしなければならないと痛感させられている。

投 稿 要 領

「教育実践学研究」投稿要領

「教育実践学研究」編集委員会

会員の研究成果発表の機会を保障するという趣旨で、茨城教育実践学会紀要「教育実践学研究」を刊行しています。投稿要領は下記の通りです。

記

一 論文の性格

論文原稿は未発表のものに限ります。(但し、口頭発表、プリントの場合はこの限りではない。)

二 論文の種類

本誌は、教育理論・実践に関する研究誌であり、原著論文をはじめ、下記の論文などを掲載します。

(1) 原著

教育理論・実践に関係ある独創的な研究成果の報告、あるいは会員の参考となるような有効な新しいデータをまとめたもの。

(2) 資料

実践報告、試験的な研究の報告、特定分野の現状などを広い角度から記録、文献等を引用して記述したもの

以上2種類を論文とする。

以下3種類は、編集委員会からの依頼によるもの

(3) 展望

特定分野の進歩や将来の見通しなどを、広い視野から記述したもの、例えば他学会の展望など。

(4) 解説

特定の主題について、専門外の者にもわかりやすく解説したもの

(5) その他

実践・研究速報、新しい試みやその結果、意見、提案、討論などを記述したもの。また学校研究実践紹介、研究所紹介、見学記、書評、評論、国際会議報告等を含む。

三 論文に投稿できる対象

投稿者は本学会会員に限ります。(共同研究の場合も同じ。)但し、依頼原稿の場合はその限りではない。

四 投稿期日

原稿は随時受けつけます。但し、発刊期日との関係で、年一回の締切日をもうけます。

原稿締切日 11月30日

発行 翌年3月

五 枚数

横書き A 4 20,000字以内（図表を含め原稿用紙50枚分以内，ワープロ原稿可）

六 原稿の作り方と投稿手続き

原稿執筆の場合，形式は，原稿執筆の手引きによります。

原稿は3部（コピー可）提出してください。なお，原稿の控えを必ず著者の手元に残してください。原稿は原則として返却しません。

七 原稿の掲載採否

原稿の掲載採否は，査読の結果などにもとづき編集委員会の合議によって決定します。（査読の結果，内容の変更を求めることがあります。）

八 投稿原稿の扱い

(1) 投稿原稿が受理されると，受領書が送付されます。

(2) 投稿原稿は，編集委員会で査読し，次のいずれかに取扱いを決定します。

A 採録

B 軽微な修正を要する条件付き採録

C 照会後再判定する条件付き採録

D 返戻

(3) 採録が決定した場合は，その旨を投稿者に通知します。

(4) 返戻と決定した場合は，返戻の理由を付して原稿を投稿者に返送します。

(5) 条件付き採録の場合，照会后，3ヶ月以上経過して再送稿されたものは，新規投稿原稿とみなします。

九 原稿送付先

原稿には，氏名（フリガナ），所属（職名その他を含む），自宅住所（郵便番号，電話番号を含む）を付し，紀要編集委員会宛

十 校正

採録が決定された原稿は，印刷の際，著者校正を1回行います。この際，印刷上の誤り以外の訂正，挿入，削除は原則として認めません。

十一 費用の負担

図表などの印刷について，特に費用を要するものは，執筆者の負担とすることがあります。

投 稿 要 領

【執筆の手引き】

- (1) 原稿の冒頭には、表題、著者名、所属機関および所在地、抄録（400字以内）および、キーワード（5～6語）を日英両語で入れる。なお、抄録の英文は省略することも可能とする。提出後は、訂正、加除を要しないようにする。
- (2) 固有名詞以外の外国語は、できる限り訳語を用い、必要な場合は、初出のさいのみ原綴を付する。
- (3) 図表等は、大きさにもよるが、一つの図表につき約500字換算する（編集委員会で検討）。
表1、図1のように一連番号を付するとともに、必ず題を付ける。また、図表などは、一枚の用紙（A4）に一つだけ描き、その挿入箇所には、原稿の該当個所の右端の欄外に指定する。
- (4) 参考文献は、文章中右上1/4に1)など、番号を付し、註として、論文の最後に記述していくか、あるいは、論文の最後に著者名をアルファベット順に一括して表現する、どちらの方法をとってもよい。
(例1) 高久¹⁾は、
 ・・・と知っている¹⁾
(例2) 高久(2000)は、
 ・・・と知っている(高久)。
- (5) 参考文献の記述形式は、雑誌の場合、著者、発表年、表題、雑誌名、巻数、論文所在ページの順とし、単行本の場合、著者、発行年、書名、発行所、発行地の順とする。
例 高久清吉(2000)『哲学のある教育実践－『総合的な学習は大丈夫か』－』教育出版
高久清吉(1999)『『自ら学び自ら考える力』を育てる方法原理－『総合的な学習の時間』の実践課題－』、茨城教育実践学会『教育実践学研究』第3号、pp.1-12.
また、参考文献は、各自発行年順、50音順等統一した順番であげること。
- (6) 当用漢字、現代かなづかいにより、数字は算用数字を使用する。

【編集・校正時の留意点】

- (1) 本誌全体のレイアウト統一の関係で、本文中の字下げは行わないこと。特に、ワープロ原稿（専用機、ワープロソフト両方を含む）の場合、投稿者の側で設定したフォントや字数・行数からの変更がされる場合があるので、留意して下さい。
- (2) 掲載決定後の編集作業、校正作業にはパソコンを使用するので、提出フロッピーには、必ずMS-DOSテキスト形式でファイル保存をして下さい。
- (3) 図表を多用する必要があるが、執筆者の側が設定する書式でフロッピーを提出する場合は、1ページの書式、フォントサイズなどを編集委員会までお問い合わせ下さい。